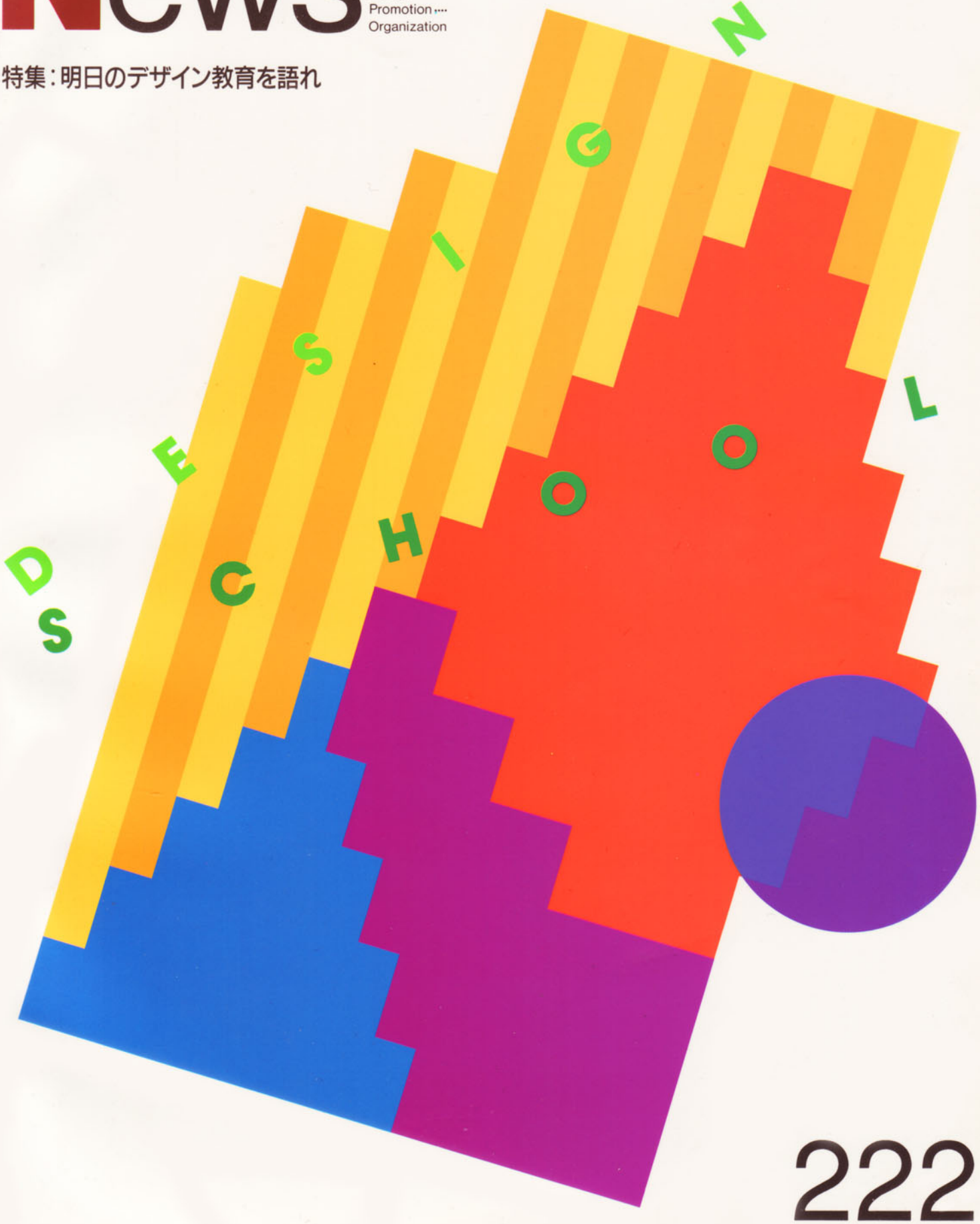
Magazine for Industrial Design

Design News

Japan Industrial Design Promotion Organization

特集：明日のデザイン教育を語れ



222

CLOSE UP 新連載：日出づる国のデザイン

「考える葦」展

「ドロップアンドスター」の提案する琵琶湖のヨシを使ったデザイン

酒井俊彦

まずは新連載の紹介から．このページでは、日本国内でおこるデザインに関するさまざまな事象を、私個人の視点から取り上げていこうと思っている．

第一回目は3月30日から4月4日まで、滋賀県立近代美術館ギャラリーにおいて行われた「考える葦」展について．主催は「DROP & STIR（ドロップアンドスター）」という関西のデザイナー有志によるグループ．これは、現在、草ぼうぼう伸び放題状態の琵琶湖のヨシ（葦：アシのこと＝すだれの材料なんかになっている植物）を積極的に利用することを呼びかける展示会で、ヨシを使った生活用品のプロトタイプの展示を中心に、ヨシ利用の可能性を広げる提案が展開された．

というわけで、ここ数年デザイン雑誌定番のデザイナーと環境問題についてのお話の始まり．「また環境問題か！」という声が聞こえてきそうだが、目にタコができるほど雑誌で取り上げられているということと、デザイナーが具体的に行動を起こしているということの違いは大きい．「考える葦」展は、今だ広く行われているとは言い難い、プライベートな時間を使ったデザイナーによる環境問題への取り組みの一例である．

1990年に設立された「DROP & STIR」は、関西を中心に環境問題に取り組んでいるデザイナーズネットワーク．パパネックの言葉に感銘を受け、自らのデザイン活動の10パーセントを環境保護に振り向けるために活動している．メンバーのほとんど全員が企業内デザイナーという構成の15人弱のグループで、どこからも資金援助を受けず、非営利で活動している．その彼らが今回取り組んだのが琵琶湖の水質浄化問題．「考える葦」展は、琵琶湖の水質改善のためのひとつの答えとして、そして同時に、デザイナーの環境問題へのかかわり方の一例として我々に投げかけられた提案である．

DROP & STIR代表の森田氏によると、琵琶湖のヨシ群落は、もともと、すだれや屋根葺きの材料として利用され、一年ごとの刈り取りで毎年新しい群落を形成し、魚の産卵場所として水産資源を保護したり、湖岸の侵食防止や富栄養化を抑え水質浄化に役立ってきた．しかし、生活の西洋化とともにヨシの需要は減り、今では立ち枯れのヨシが水質汚染の一因にさえなっている、という状況である．このため、彼らは、琵琶湖の水質の改善、魚の産卵場の確保、湖岸の侵食の防止などのために、ヨシを使った製品を開発することにより、その消費量を伸ばし、一年ごとの刈り取りサイクルを甦らせようと試みた．

会場ではアクセサリーからストリートファニチャーまで幅広い製品へのデザイン展開の提案が目を引き、すぐに商品化が可能なものも見受けられた．また、これらの商品には適さない、いわゆる見た目の悪いヨシの利用方法としてヨシによる紙や合板の試作品も展示されていた．このような提案とともに、環境問題教育の教材なども展示されており、見た目の華やかなプロトタイプの発表会に終始していない彼らの活動姿勢に好感がもてた．

昼間会社勤めのデザイナーが、紙をすいてくれる工場を探し、ヨシのチップで合板を作ってもらえるよう掛け合い、試作品を作り、展示会を開くということは一体どれほどの情熱がいるのだろう．関西弁の「いやーほんま、大変やでー．」からは想像できない苦労があったはずである．

結果的には、提案そのものの商品化が可能であっても、すぐにプロジェクトとして動き出すわけではなく、また、DROP & STIRも企業とのタイアップ等の活動は考えていないため、ヨシ再生という目的の達成までの道のりはまだまだ遠いという感想をもたざるを得なかった．しかし、「デザインも、ノウハウもばくってもらっていいですから、だれか実行に移してくれる人が登場してくれたら、それでいいんですわ．（関西弁）」という森田代表の言葉と今回の展示会のキャッチコピー「一滴が波紋を作る」が示すように、彼らは文字どおり最初の一滴となることを自らの役割と考えているようだ．今後、行政や企業を巻き込んでの大きな波紋が広がることを期待したい．デザイナーの社会的意義について考えさせられた展示会であった．

●「DROP & STIR」連絡先：代表 森田春昭 Tel. 06-325-4990

●「考える葦」展 1993年3月30日～4月4日（滋賀県近代美術館ギャラリー）



照明器具「Reed Lamp」（D＝金氏惇介）
走常灯（D＝森田春昭）
照明器具「繭玉」（D＝川本誉文）